

所属・資格 史学科・教授

申請者氏名 加藤 直人

研究課題		清代満洲語文書に関する研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	中国清代の文書資料の特徴は、歴代王朝が基本的に用い、その形式を作り上げてきた「漢語」によるものと、清朝の「国語」である「満洲語」によるものがみられることである。満洲語による文書は、いわゆる日常的な会話手段としての利用がほとんどみられなくなった19世紀中葉以降においても、大量に流通していた。本研究は、清末における満洲語文書の実態とその存在意味について考察するものである。基本的に、公益財団法人東洋文庫、天理大学附属天理図書館等、我が国における満洲語文書所蔵機関での実地調査ならびに、いままで集積した資料のデータ整理を行う。
	研究の結果	公益財団法人東洋文庫に所蔵される清朝の文書資料のうち、とくに重要と思われる「鑲紅旗満洲都統衙門檔案」について継続して調査、研究を実施した。雍正元年（1723）に設置された同衙門（官署）では、清朝の支配層である八旗のひとつ鑲紅旗満洲に属する旗人を管理していたが、東洋文庫には、その衙門の文書資料が2,000件以上残されている。これらの文書については、漢語によるものと満洲語によるものが存在するが、清朝の規程上、旗人関係のものについては、時代によっても異なるが、基本的に満洲語による作成が義務づけられていた。本研究では、清朝末（19世紀末～20世紀初）における八旗の官署の文書作成がいかなる言語によってなされていたのかについて検討をおこなった。その結果、他の官署とのやりとり、また、職位継承関係の文書ならびに系図等をはじめ、いまだ多くの文書に満洲語が用いられていることがわかった。
	研究の考察・反省	一部の研究において、清朝末には清朝の「国語」である満洲語は「過去の遺物」となっていたという見解もみられるが、清朝においては、辺疆、旗人関係の官署等において、20世紀にはいつてからも満洲語による文書作成が行われており、それが清朝の支配貫徹に重要な役割を果たしていた。清朝史においては、すでに文書資料を用いた研究が主流となっているが、清朝国家体制の基軸を構成した「八旗」を検討するに際しては、満洲語文書の利用が不可欠となることがわかった。今回は、我が国の研究図書館のひとつである東洋文庫所蔵の文書について研究を実施したが、中国・北京にある中国第一歴史檔案館（国立第一公文書館）には膨大な数の満洲語文書が存在する。これらの文書はいまだ公刊されていないが、今後は、同檔案館所蔵の鑲紅旗満洲都統衙門檔案をはじめとする八旗官署文書についても検討を加える必要がある。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所  研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>今年度末に開催する予定であった清朝史にかかわる国際ワークショップにおいて、研究成果を議論することになっていたが、感染症問題により延期となり、成果を出すことができなかった。今後、延期となったワークショップ開催された際には、本研究の成果について、海外の研究者を交えて検討を加えていきたいと考えている。</p>	